

9 議題

エ. 地形と遺跡分布からみた柏市域の土地利用 資料について

(西野委員) この資料は、主に旧石器～古代の地形と遺跡分布から見た柏市の特徴、各時代の人々がどのように土地利用をしていたかについてまとめたものである。

P2 千葉県地形図(明治時代の2万分の1迅速測図の谷を色塗りした)を重ね合わせたもの。柏市の所にある茶色の線は、古鬼怒湾水系と東京湾水系の分水嶺で、下野-北総回廊がこれにあたる。江戸時代の利根川東遷で途切れてしまったが、それ以前は日光や足尾山地の山麓までつながっていた。これまで見逃していたが、千葉県史あたりから注目するべきではないかという話になり、色々な時代にここがつながっていたということは大きなことだという認識をだんだん強めているところである。それが柏市の市域の西側を通っていたことは大事なことだと思う。黄色の線は小さな分水嶺である。これを見ると、色々な水系にまたがっていることが柏の特徴であるということが言えると思う。基本的に古鬼怒湾水系だが、東京湾水系にも少しかかっている。

P3 北総-南総回廊というもう一つの道は千葉市の土気で交わっている。おそらく、ここをシカなどが移動していたと考えられ、旧石器時代や縄文時代に人が多かったということだろうと思う。

P4 細かく見た時の水系は4つ、古鬼怒湾、手賀沼低地、若干だが東京湾の水系にもかかっている。下の地図左側は旧石器時代の遺跡ドットをおとしたもの、右が拡大したもの。関東地方が圧倒的に多いが、その中でも一番多いのが下総台地で、全国の遺跡約1万箇所の中の約1割を占める遺跡が見つかっているのは大事なところであろうと思う。その中でも柏市は分布の中心にあるということである。

P5 縄文時代のすべての遺跡をドットに落とすと、日本の中で縄文時代の遺跡があるのは下総台地である。柏市は分布の中心の端に位置する。P5下に貝塚の説明がある。千葉県は一番貝塚が多くあることで知られている。全国の約3割が千葉県にあるということで、一番多いのは東京湾沿岸で、そこに大きな貝塚があることが有名だが、柏市は市町村別に見ると千葉県内では5位である。50箇所以上の貝塚があるが、意外なことに貝塚が多

いというイメージがあまりない。今は千葉県でいうとかなり内陸にあるが、実は貝塚が多い。

P6 貝塚の分布図。地形図の中に赤い点で貝塚を示し、大きな点は大型貝塚である。ほとんどは中期と後期（5000～3500年前）までに作られた。柏市の範囲は大きな貝塚がないが、小さな貝塚がたくさんあるのが特徴である。この貝塚の分布が多いところを灰色で網掛けしているが、この中で一番多いのが東京湾沿岸で、全体の7割が東京湾、2割が古鬼怒湾にあり、1割が太平洋にあるという割合になる。柏市に貝塚が多いのは、古鬼怒湾と東京湾が柏市の東西のところまで入り込み、柏市の海でハマグリがとれた時期があったことを示している。

右側の図8は縄文時代前期の貝塚の分布だが、奥東京湾、古入間湾ができた。ずっと奥まで海が入りこんだが、2つの湾を囲むように貝塚が集中していて、この時期はムラ自体もここに集中していた。古鬼怒湾の貝塚をすべて点に落としたのが、左の図7である。この図には貝塚が伴わないムラを青で、貝塚を伴うムラを赤い三角で示している。このようにおびただしい数のムラが集中していて、奥東京湾から柏・我孫子の台地にかけて人口がとても集中した。この時期には千葉市は少なく、人口がこの東葛地区に集中したと言って間違いないと思う。そういう繁栄の時期があった。それが、古鬼怒湾と東京湾が接近していたことでユニークな場所になっていた。2つの海の間を内陸の道が通っていて、シカが通ってくる時にそこでしとめればよいというところが限定できたと思う。そういうことが、人口が集中した理由の一つになっていると言える。

P9 最初に縄文人が定住したムラがたくさんできた時期。東京湾沿岸の2箇所に40数カ所の大きなムラができた。ムラを作った人たちは千葉の人たちだけではなく、関東の広域から人が集まってきただろうと考えられる。千葉市付近にはその前のムラがないということと、住居跡の形や出てくるものから考えると、北関東や西関東の人などが強く関わっていたことが見えてくる。前期には東葛地区に集中していたのが、東葛と千葉市・市原地区と、2つに移っていった。古鬼怒湾の中でも佐原市や香取市にかけて大きな貝塚がいくつもあるという状況である。

P10 赤い三角は貝塚、青い三角は貝塚がない集落を示す。笹原と書いてある場所は最近発掘しており、ここも赤い三角となる。大型貝塚群のすぐ近くには、貝塚が伴わない集落群が接近してあるということが見えてき

た。貝を日常的にたくさん持ってくるようなムラのすぐ近くに、貝をまったく運ばないムラが多くあることがわかった。おそらく一方が貝を利用しなかったということではなくて、貝殻を持ち運ばないような形で利用していたことが強く考えられる。一番近いところでは数キロしか離れていないためである。そして、遺跡の分布をみると、笹原から榑方、北側の方は野田市の東亀山から我孫子市の並塚東まで点がつながっている。この東端の並塚東から榑方の間は手賀沼大橋のあたりで一番渡りやすい所であり、そういう連絡が密接な関係にあるような社会だった。こういう社会のかたち、分布状態のようなものが手に取るようにわかることがこの地域の面白いところであり、お互い全く違うあり方のムラ、多様なものが認め合って生きてきたということがわかってきたところが最近の面白い成果である。

P11 縄文時代の終わりの方で、一度大型貝塚がなくなり、その後後期になって大型貝塚群ができ、東京湾の大型貝塚が小さくなっていく中で、手賀沼・印旛沼の方に社会の中心が移っていったことがわかっている。柏市はその中で上根郷、大井、岩井という3つの大きなムラがわかっている。その社会の集まりというのは図12のように茨城県側のムラともつながっていたことが確実である。鬼怒川、小貝川、古常陸川というようなところも、船で交通が発達したからこそこのような分布になる。この分布は連綿と東北地方までつながっている。縄文時代後半の終わりの方にこうした広域のネットワーク社会ができ、その中心に柏市もなっていた。

P12 弥生時代の遺跡分布である。市原から君津市の付近には大きなムラ、環濠集落と呼ばれているが、広い低地を共同で灌漑農業をしたムラが集中している。これは、東海地方からつながる弥生時代らしい文化の東端にあたる。一方で、手賀沼・印旛沼付近には大きなムラがほとんどなく、ムラの形がわからず移動しながら米作りをした人々と考えられる。この分布は、東北地方からつながる縄文文化の影響を色濃く残した文化の南端にあたる。千葉県の中で2つの文化が対峙したまま長くどちらかがどちらかを凌駕することがない場所だったという所が千葉の面白いところである。

P13 土器も、地域で分かれているが、お互いの土器を使ったりして、うまくやっているというところである。

図15は、ヤマト王権の影響で古墳をつくるようになると、市原から君津あたりは大きな古墳が作られる中心になるが、柏周辺にもいち早くヤマト王権に関わる勢力が入ってきたというところで、面白いところだと思う。

P14 大型の前方後円墳の分布が分かれており、このような分布のため、柏市あたりは少ないということになると思う。

P16 古代の図、主な遺跡と推定される水路・陸路が書いてある。発表はしておらず作業図と考えて欲しい。柏市の位置をみると、古東海道が付け替えて武蔵から柏を通過して常陸へつなぐような、対蝦夷戦に向け最短距離で行ける所の間となった。その道から離れた所にある茶色の点、柏市花前遺跡や流山市富士見台遺跡では製鉄遺構が見ついている。東北進出へ向けた補給・製鉄を行っていた所ということになると思う。

P17 房総三牧を先ほどの地図に重ねると、分水嶺を通過しているということを示した地図である。